

歴博 くらしの植物苑だより

第127回くらしの植物苑観察会 10月25日(土)

江戸時代のバラ

御巫 由紀(千葉県立中央博物館)

「江戸時代の日本にもバラがあったんですか?」・・・答えはイエスです。日本の野山に自生していたバラはもちろんです、中国から持って来られたバラもありました。今も昔も舶来品は珍しい、ということでしょうか、書物や絵画では圧倒的に中国のバラが多く記され、描かれています。

1 日本のバラ、中国のバラ

元禄8年(1695)伊兵衛三之丞が記した「花壇地錦抄」には『荊棘(いばら)のるひ』として、13種類が挙げられています。

はまなす	春末 花こいむらさきひとへ大りん
らうざ	花さくらいろ二見ゆ八重ひとへ大りんらうざはまなす八葉種に用
長春(ちやうしゅん)	こいむらさき中りん八重赤キやう二見ゆ四季ともに花さく
白長春(しろちやうしゅん)	八重白四季二花咲櫻色に見ゆる
猩々長春	くれないひとへ四季二花さく
はと荊(はとばら)	夏初 八重一とへあり白中りん
牡丹荊	夏中 紫八重大りん
ちやうせん荊	春末 白大りん花形つばきのごとし
ごや荊	夏初 八重中りんうす赤
山柵荊(さんしょうばら)	うす紫八重中りん葉さんせうのごとし
箱根荊(はこねばら)	夏初 白大りんひとへ
唐荊(とうばら)	春中 白八重大りんなるほどせんやうなり 花形ふさのごとし青キほど白し
荊茨(さるとりいばら)	夏初 花形藤のごとく色うこん上々

このうち、正体が明らかなのは 印の「はまなす」(今のハマナスと同じ)、「長春」(コウシンバラ)、「白長春」(白花のコウシンバラ)の3つだけ、あとはどれもひとひねりあって悩めます。おそらく 印の「猩々長春」はコウシンバラの特に赤いもの、「ちやうせん荊」は「春末 白大りん花形つばきのごとし」と解説されていることからナニワイバラ、「山柵荊」は「うす紫八重中りん葉さんせうのごとし」とあるので「イザヨイバラ」。「箱根荊」のほうは「夏初 白大りんひとへ」とあるので今で言う「サンショウバラ」ではないかと思われます。これが正しいとすると、日本にもとからある野生種は「はまなす」と「箱根荊」のみ、あとの「長春」、「白長春」、「猩々長春」、「ちやうせん荊」、「山柵荊」は、中国(および韓国?)の野生種または園芸品種です。印の「らうざ」、「はと荊」、「牡丹荊」、「ごや荊」、「唐荊」、「荊茨」については講演で詳しく考察します。



ハマナス

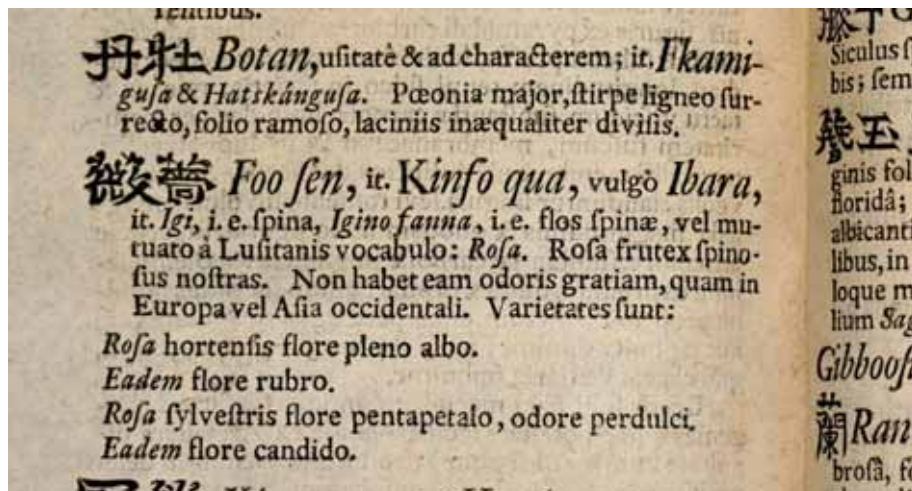


コウシンバラ

2 コウシンバラとは？

江戸時代の書物でバラを示すのに使われていたことばは、「長春」、「月季」、「薔薇」、「玫瑰」です。いずれも中国語ですが、「長春」、「月季」は四季咲きのバラ、いわゆるコウシンバラの仲間を指し、「薔薇」はノイバラのように枝を延ばしかからまるものか、またはバラ全体の総称、「玫瑰」はハマナスに近い園芸品種を元来指していたのが、日本にきて時折ハマナスそのものと混同されてしまった例もあるように思われます。

では、最初にコウシンバラ(庚申薔薇)という名前が記録に現れるのはいつでしょう？ 中国からもたらされた「長春」、「月季」は庚申(こうしん)の日が来るたび、つまり60日に一度花を咲かせるので「コウシンバナ」または「コウシンバラ」と呼ばれるようになったと言われています。私が見た限りで最も早いのは、江戸時代後期の文政11年(1828) 岩崎灌園が「本草図譜」の月季花の項で「かうしんばな」と記し、翌年には、水野忠暁が「草木錦葉集」で斑入りの長春の解説として、「一名かうしん茨」と書いています。明治時代に入ってから「コウシンバラ」に統一されていったようです。



ケンペル「廻国奇観」1712年

次回予告 第128回くらしの植物苑観察会 2009年11月28日(土)

「菊の栽培書」 平野 恵(明治大学兼任講師)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料